

創業20周年
社会貢献とその決意



代表取締役社長
武藤 敬一

おかげ様で二十年、医療と福祉のかけ橋になれたらとの思いで始めた事業がここまで来られたのは望外の幸せです。これもひとえにさくらメディカルを応援してくださった沢山の皆様方のおかげです。ありがたいことです。

この二十一年間で何と云いまでも、二〇〇〇年の介護保険の導入が弊社にとって一大転換点でした。それ迄蓄積してきたノウハウが一举に県下に拡大され、サービスを受け入れてもらえた訳です。福祉用具・医療機器の販売・レンタル中心から、住宅改修の提供、居宅支援・訪問介護・訪問入浴など介護保険サービスと総合的に拡大していき、利用していただいております。拠点も上越から新潟・新発田・長岡・魚沼・長野と広域になっ

ております。福祉事業には多くの業種の参入もありますが、弊社は在宅サービスに特化した形で医療福祉の一翼になれたらと思っております。ところがここに来て二〇〇六年の介護保険の改正が当初の理念を大きく脅かしているような気がしてなりません。その最大の要因が財源不足です。それを踏まえて、日本の社会はどうか？これからまだ増え続ける高齢者をどう支

えていったらよいのか、我々事業者も真剣に考えねばなりません。弊社は十年、医療と福祉の在宅現場で働かせていただき、介護保険導入の二年前からの研究期間を経て足掛け十年。おおまかに十年ごとに大きな節目を迎えております。これからの十年を考えると、何が弊社に求められているのか、どんな社会貢献ができるのか、身の引き締まる思いです。これからまた、皆様の御支援、御鞭撻をお願い申し上げます。



高田城三重櫓と桜《村山 陽画》

さくらメディカル二十年の歩み		年月
世の中の出来事		昭和63年4月
医療機器・福祉用具・介護用品販売のさくらメディカルを設立		平成2年4月
医療機器・福祉用具のレンタルを開始		平成3年2月
有限会社に移行(資本金500万円)		7年7月
シルバーマーク(福祉用具レンタル)認定事業所となる		11年4月
資本金1000万円に増資		11年8月
組織変更・株式会社に移行(資本金2200万円に増資)		12年4月
介護保険制度が導入日本銀行が2000円札を発行		12年5月
介護保険サービス事業所の指定(訪問介護・訪問入浴介護・福祉用具貸与サービス)		13年5月
長岡営業所開設(長岡市)		13年6月
新発田営業所開設(新発田市)		13年6月
居宅介護支援事業所指定(上越市高田)		14年11月
魚沼営業所開設(旧六日町市)介護センター開設(上越市高田)		15年2月
物流センター新設(上越市高田)		15年4月
新潟ユニゾンプラザ店開設(新潟市)		15年7月
新発田中央営業所開設(新発市・福祉用具貸与等)		16年5月
居宅支援事業所開設(新潟市・長野営業所開設(長野市))		16年7月
福祉用具の消毒工程管理認定制度の事業所認定(物流センター)		17年2月
新発田営業所・新潟中央営業所を統合し新潟支店開設(新潟市)		17年10月
魚沼営業所が豪雪の影響を受けて移転(南魚沼市)		18年1月
福祉用具の消毒工程管理認定制度の事業所認定(新潟支店)		18年2月
直江津介護センター新設(上越市直江津)		19年3月
市直江津・居宅介護支援事業所(新潟市)介護ショップ新潟店開設(新潟市)		19年6月
直江津介護センターに訪問介護事業所を開設(上越市直江津)		19年11月
あらひ介護センター開設(妙高市・居宅介護支援事業所)		20年3月
長野営業所が業務拡充に伴い移転(長野市)		20年4月
会社設立20周年		
高齢化率11.2%(13,785千人)		
消費税率導入・ベルリンの壁崩壊(昭和64年)		
多国籍軍がイラクへ空爆開始(平成3年)		
阪神大震災(平成7年1月)		
世界人口が60億人を突破(平成11年)		
シドニー五輪で高橋尚子(女子マラソン)金メダル(平成12年)		
米大リーグでイチローがMVP・新人王に輝く(平成13年)		
日韓共同開催のサッカーワールドカップ開幕(平成14年)		
新潟県中越地震(平成16年10月)		
中部国際空港開港・愛知万博(愛・地球博)開幕(平成17年)		
人口減少社会に突入		
新潟県中越沖地震(平成19年7月)		
高齢者率21.4%(27,396千人・昭和63年の約2倍)		

訪問介護



上野 義太郎 様 (高田訪問介護)

今春八十六歳を迎えられる上野様は現在、奥様と娘様ご夫婦、お孫さん二人の六人家族です。脳梗塞により右半身の麻痺と言葉が出ない後遺症があります。食事やトイレ、着替え等身の回りのほとんどは自分でされ

ます。ヘルパーは入浴と歩行動作のお手伝いに訪問しています。

ご利用を始めてから七年になる今でもお変わりなくお元気です。その秘訣は「好き嫌いなく何でもしっかり食べているから」(奥様)とのこと。また、「ご家族がおいしいちゃんを大切にされていて、寝たきりにさせない努力をされている」(ヘルパー)のも元気の源です。

サービスの感想を伺うと「みんないい人ばかり来てくれる」と語る奥様の横でご本人も「うんうん」と笑顔で頷いてくださいました。

訪問入浴介護



村椿 マサノ 様 (上越市在住) 村椿 美恵子 様 (ご家族)

訪問入浴サービスの利用をはじめて三年目になります。最初は、家のお風呂にどのように入れてくださるのか心配でしたが、まったく心配無用でした。母がベッドで寝ている部屋の隣の部屋に、ポータブル(車に積んで

持ち運びできる)の浴槽が運び込まれるのを見て、とても驚きました。 昨年の冬至の「柚子湯」では、体が温まるとともに、柚子の匂いを嗅いで元気づけられ、とても喜んでいました。また、ケアマネジャーが気づき、訪問看護師や主治医の先生からもアドバイスをいただいた床ずれも、一年がかりで最近やっと完治しました。

毎日大変ですが、大勢の方々が母のケアとともに、介護している私たちのケアもしてくださり、頑張っています。

居宅介護支援



高野 ミル 様 (新潟居宅介護支援事業所)

この春で九十四歳を迎えられる高野ミル様は、昭和十三年から京都伏見稲荷神社の預所神主をし

声にハツとして『負けてなんかいられない』と我に返った」とさっぱりと優しい表情で話してくださいました。

そんな高野様からは、「自分がまず人に尽くさなくては駄目」、「明けない夜はない。くよくよしなで必死で働く」等々日々忘れかけていた大切な言葉もいただき、明日への活力となっています。

おれたちゃ元気、売りはそれさ!

『ざいたくしんぶん』の特別企画の一つとして元気な利用者さんの姿を、県下のさくらメディカルネットワークを通してサービス別に伺いました。ここには在宅介護の事例はともかく、努力している利用者さんがたくさんおられました。皆さんの元気を頂きたいほんです。

住宅改修



田中 ツネ 様 (長岡営業所)

これから現在に至ります。『今年で現役を引退します...』と今までの思いを語ってくださいました。

高野様はご結婚を機会に新潟市に來られました。「旦那様が競馬や賭け事が好きで月給を一切家に入れてくれなくてね。長女をおぶって長男の手を引いて心中しようと万代橋をボーッと何往復もした時もあった。でも『お母さん寒いよ。おうちに帰ろうよ』という長男の

田中ツネ様との出会いは、中越地震から約一年後の平成十七年十二月でした。被災されて娘さん

福祉用具貸与



布川 栄太郎 様 (新発田営業所)

平成十六年よりご利用いただいております布川栄太郎様(胎内市)に普段の生活を伺いました。

毎朝、六時半頃の起床後には、介護予防の一環としてデイサービスセンターで習った手足の運動が日課となっています。運動後の朝食では、介護保険でレンタルをされた車椅子をご利用しておられます。食後の時間は、

福祉用具貸与



根津 マツ子 様 (魚沼営業所)

私は七十七歳で一人暮らしの在宅障害者です。さくらメディカルさ

じっくりと新聞を読んだり、テレビを観ることが多いようです。特に、大の長島茂雄と巨人の大ファンで「野球番組は見逃せない」とのこと。座って過ごす機会が多い布川様にとって、レンタルの昇降座椅子は、安全・安

一人の時間が長いと寂しいとご家族の思いからリビングを一階にある田中様のお部屋の隣に移すことになりました。そこで私たちは、田中様やご家族の願いを実現する住宅改修をご提案しました。

最近の状況をお伺いすると、「一年ほど前から車椅子の利用が多くなり、早くリフォームしておいてよかった」と笑顔で話してくださいました。

心な生活と奥様の介護軽減の支えとなっています。

旧黒川村の村議会議員を三期勤められた頃は、趣味をつくる時間もないほどの仕事中心の生活でしたが、今はこのような生活を維持できればと願っております。

んどのお付き合いは六年になります。今から八年前にミオパチーという筋疾患と診断され、お医者さんや看護師さんの訪問医療とヘルパーさんの訪問介護を受けて在宅療養をしております。疾患によって立つことすら困難で、ヘルパーさんがいらっしゃるらない時(特に夜間)の排泄に困り、長い間、困っていたところ電動走行リフトと水洗式ポータブルトイレの提案をいただきました。検討の末、ベッドの傍に設置したところ自分一人でトイレに行けるようになり、今までの悩みが解消され、大変喜ばしく思うとともに感謝の気持ちでいっぱいです。この度の二十年にお祝いを申し上げますとともに、三十周年目も一緒に元気で迎えられるように過ごしていきたいと思ひます。

●出席者（写真・右から）
・中島紀恵子（新潟県立看護大学 学長）
・市川 信夫（上越保健医療福祉専門学校
名誉学校長、「ふみ子の海」原作者）
・武藤 敬一（さくらメディカル株式会社
代表取締役社長）

と き 平成20年1月23日(水)
午後三時～
ところ 料亭やすね 紅葉の間



さくらメディカル創立20周年記念特別企画

鼎 談

日本の高齢者福祉は「成熟社会」

——本日は、当社の二〇周年記念紙を出すにあたりまして、市川信夫先生と中島紀恵子先生、弊社・武藤敬一社長との鼎談を特集しました。中島先生、市川先生には経歴と経歴を生かした高齢者

の話伺います。
武藤 お一方には枠にとられず自由にお話いただきましょう。「どう生きるか、どう死ぬか」という厳しい話も飛び出してくるかもしれません。

死へのリアリティー

中島 どう死ぬか……楽しくなんて死ねないけれどね。死は私くらいの年齢になっても未知なる世界で私を君臨している。若者のように明日への希望が少なくなった分、死の存在は身近な高齢者にとって未知なる世界です。一方、現実感をもって、未知ではない世界を体験することといえば介護体験です。これは現実の世界になるのでしょ。自分で老いて行く様を体験するようになって、これだけ老人看護の本を書きながら、知識として正しいことしか書いてない。これは確かなことなのに、「え！本当はこうなんだ」という目から鱗の現実を実際のこととして伝えられない。現実とその書いていることがかみ合わない。そんなことをよく思うようになって。老人文学がよく読まれている理由がわかります。私も、文学が老年期の語っている、その言葉の豊穡さとか、現実感の伝え方とか、そういうことにいつも感動して、小説家や歌人の言葉を自分の書く物によく引用したりします。それぐらい私たち高齢者が生きていか

なければならぬお手本は、やっぱり知識で与えられることは少ないんですね。あることを甘受する経験、そのことを伝える力のある人の話、あるいは短歌、市川先生の小説など、そこにこそリアリティーがあるのでは……。
市川 それでは気楽にイスラムのお話をひとつ。イスラムのある町で夜遅く、街灯の下でね、若いお嬢さんが一生懸命地面を何か探していたんです。そこへたまたま通りかかった男の人が「何を探しているんですか？」ときいたのです。そして「大事な鍵をなくしてしまつて、家に入れないんです。」と。そうしたらその男の人は大変かわいそうに思つて「じゃあ僕も一緒に探してあげましょう」と。でもいくら探してもない。そこで男の人が不審に思つて「お嬢さん、本当にこのあたりで落としたんですか？」と言つたら、「いえ違います」と。ではいったいどこで落としたんですか」ときいたら、向こうの暗いね、真っ暗な街の方を指差して「あそこで落としたんです。

でも私、あそこへ行くのが怖いからここで探しているんです」と言つたんですね。
中島 おもしろい(笑)
市川 これは要するに、私たちの生きている所が暗いところ、楽しい所、活躍できる所。暗い所は死。これはもうわかりますよね。そうすると、その間のちょっとした暗い所は歳をとった人間がいるところ、そういう例えなんです。今の女の子の暗い所みたいに、死を考えたくないということだと思ひますね。

さくらメディカル創立の意志

中島 いいお話ですね。武藤さんはこのお仕事をする時に、やはりそういう死に向かつていい生き方ができるようにお手伝いしようというそういうつもりでこのお仕事に関わりましたか？
武藤 そうですね、私は農家の長男でして、やっぱり一家の大黒柱みたいな意識がありました。生計を立てる、柱にならないといけないというのとですが、サラリーマン失格で、首になつちゃつて、収入得るために事業を立ち上げました。最初は必死でした。やれることはもう何でもやりましたが、三年間は食えなかつた。でもまあ幸いにして三年たつて、めどが立つて、今日があるんです。とにかく収入を得るのが最大の動機だったんで、理念も何もありません。それには仕事としてお客さんに認めてもらわ

死。これはもうわかりますよね。そうすると、その間のちょっとした暗い所は歳をとった人間がいるところ、そういう例えなんです。今の女の子の暗い所みたいに、死を考えたくないということだと思ひますね。

なければいけない。まだ未知の分野で認めてもらえていない何か仕事がないかと探して、というあたりで福祉に一番力を入れてきたというのが出発点だったですね。

中島 それって、私たちと同じことですよ。誰もが高齢者に関心がある世界に生きてきたわけじゃない。学問的にいって、老年の研究について、老人はいつか役に立たない人間になる、その役に立たないところをどう見定めるかっていうところから老年学が始まつているわけです。どんなふうに関心しているのかとか、家族制度、労働、精神の衰え、学習能力の世界、そういうふうにながティブなところばかりが学問の関心事だったんです。本当の意味で高齢社会になつてこんな高齢者がいて、高齢者が普通にいる社会をみんなが体験しているのはこの五十年くらいですからその現実に気がついて学問は遅れて始まつたわけなんです。文学だってそんな文学は、谷崎潤一郎の『瘋癲老人日記』だった頃だと思ひます。それが老人が老人を書いた最初くらいかもしれないですね。

介護問題では、井上靖がお母さんのことを三作にして書いている。これは、私が認知症を勉強するにあつて何度も何度も読みました。そんな感じで、介護問題はあつたけれども、高齢化社会において高齢者がどうやって生きぬくか、あるいは高齢者自身が若く生きたいわけだから、どうやって若さを保つていられるかみたいな話。これは今でも王道ですよ。ですからアメリカから入ってきた『サクセスフルエイジング』だとかね、そういう本が高齢者として受け入れやすい。その最たる老人モデルが日野原重明先生や瀬戸内寂聴さんで、ああいうふうに生きたいと思つていますが、だけど、誰もがそう生きるわけではないわけでお二人が本当に知つてほしい事は死に行く人間の生き方なんですよ。高齢者が高齢化社会で

本当に生きている社会、これを私は成熟社会だと思っ
ています。初めて日本は成熟社会として世界で一番先に走らな
いといけないところに今
いるんだと思います。

市川 清沢満之、明治の近代化の、浄土真宗の宗教改革のリーダーなんです
が、彼の言葉に「死もまた我等なり」死は別のものじゃないですよ、私
たちが生まれて生きたそ
の中に一緒に繋がって
いるのが死なんですよ、と。
だから死をいやしめるな
と。で、それを今も受け
継いで運動している人
たちがいるんですよ。お葬
式に行くと、清めの塩っ
ていうのがありますよね。
家に「ただいま」って帰
ってくると、奥さんが出
てきて塩をまいてくれる。
ということ、けがれの
場所へ出たから清めると
いう。でもそれはやめま
しょうと。死も私たちな
んですよ、とね。だから
他人の死にあつてきたら、
自分もいつかという思い
をこめて、他人の死をけ
がれということは考えな
いという運動なんです。

中島 死つていうものは
ちゃんとあるんだよつて
いう世界、死を待つ世界
じゃないんだという世界、
あのそういう世界も含め

て新しい文化をおこす入
り口に今いるんだと思
います。私はそういう意味
で武藤さんにどうして会
社を興したの？って聞
いたのはその文化おこ
しの自覚があつたのか
つてじゃない、二十年
たつた今はどう？

武藤 二十年はまあ長い
と思つていますけれど、
紆余曲折がありました。
今は、もうだんだん自
自身で最初の理想がわ
かなくなつてきてい
る心の中で反省して
おります。お二人の話
の内容が私のテーマの
ヒントにならな
いかと考えていま
すが、だんだんわ
からなくなる……



武藤社長

中島 還暦になつた自分
と仕事がちやんとく
つかなかつてい
る？
武藤 くつつかない
ですね。いろんな面
がくつつかなくな
つて、だんだん
離れていくん
ですね。さ
つき市川先生
もおっしゃ
つたんですが、
自分の思
いが伝わりに
くい。今、
社員が二百人
近くいるん
ですが、懸命
に努力して
いても、伝
わらなくて
そういうジ
レンマがで
すね、

自分自身をうまく統合
できないとい
いますか。

中島 そうですね。私
が看護と介護を語
りたくないとい
う気持ちと共
通しているか
もしれません
ね。

武藤 こんなに人間
についてい
う思いが今非
常に強くて、
そのあたりを
どううまく
解決してこ
られたのか
とお話の中
でのヒント
に期待しま
した。

中島 ひたすらねじ伏
せてきただけ
ですよ(笑)
「認知症の
人たちは何
も判らない
人間ではな
い」とか、
そういうこ
とを一所懸
命伝えてき
ていわけ。
「高齢者は
馬鹿

レンタル文化の出発

武藤 そう言つて
いただけた
と私、すごく
嬉しいです。
私どもの会
社の一番得
意な分野と
いうのはレ
ンタルなん
ですね。こ
れは私が独
立した当初
、何がで
きるのかと
いうのを考
えました。

在宅サービ
スで一生懸
命まわらせ
ていただい
た時に、十
何万円とい
うベツドを
買われて、
何ヶ月も
使わないう
ちにもう
いなくな
つたベツド
を倉庫に仕
舞つたり、
部屋の隅に
片付けたり
してしま
つたとい
うもつた
くない

じゃない、本
気になつて
生きている
、高齢期は
もつとも過
激な生き方
が要求され
る、という
高齢者がい
るんですよ
と。必死で
伝えてきて
いるわけ。
こんなに懸
命に話して
も、介護問
題として取
り込んでし
まい、その
上で、介護
と看護の違
いを聞かれ
てもね。そ
れ位、高
齢社会に高
齢者のため
の介護を……
という新し
い文化を開
くのは並大
抵のこと
ではなく、
武藤さん
がそういう
道を切り開
いてきてい
る一人なん
だといけな
いお仕事
じゃないで
すか。

話を聞きました。
おじいちゃん
が先に逝つ
たから次は
おばあちゃん
にとつてお
こうとかい
うそういう
ケースを結
構見ていま
して、これ
だったら、
今必要とし
ている人た
ちに使つて
もらえばい
いじゃない
かという発
想からレン
タルが生ま
れたんです
。これがも
う平成の二
年か三年頃
、独立して
間もなくに
そういうこ
とを少しづ
つ始めてし
て。その後
介護保険で
爆発的に制
度が浸透し
てきまし
て、今はう
ちは県下の

20%近くを
やらせても
らつていま
すところま
でできた。そ
ういう切羽
詰つて在宅
から得たヒ
ントでお役
に立つてき
たというの
は、この二
十年間で最
大に評価し
ていただけ
るのではない
かと思いま
す。

自分が発見
したレンタル
の実務を国
が制度化し
てきたとい
うことが、
実際にこれ
は私にとつ
て奇縁でし
て、「何だ同
じことを考
えているや
つがいろ
のか」とび
っくりしま
した。

中島 そうですね。
家族の会を
作つたのは
私が四十歳
位でしたか
ら、四半世
紀、全国的
に運動して
きました。
このレン
タル運動と
いうのは我
々もやって
きたんです
よ。

武藤 自分で発見
したと思つ
たんですけ
ど(笑)

中島 福祉用品で
重装備した
つて高齢者
はどんなに
変わつてい
くじゃない
ですか。こ
ういう無駄
をレンタル
屋さんがい
たらどんな
にいいか
つて。私、
電話相談を
ずっとやつ
ていたん
ですが、全
国のレン
タル屋さん
を必死で探
しました。

武藤 そうですね。

中島 はい。それ
はあなたが
まだ独立す
る前ですよ
(笑)だから
世の中でい
っぱい市民
力が頑張
つて何もな
いところか
ら

やって、よう
やく業者が
でき、そし
て企業が起
き、それか
ら国が動く
んです。そ
ういう仕組
みですよ。
武藤 そうですね
、つくづく
そう思いま
す。

どれぐらい
市民がしゃ
んとしな
いといけ
ないか、こ
れが今日の
中心にな
るお話だし
、その中
で高齢者
がしゃん
としな
いとい
けないか
というの
が私と市
川先生が
話したい
こと
ですよ
ね。

背筋シャッキリ

市川 ただ私は
七十五歳
で後期高
齢者とな
つたわけ
ですよ(笑)
でも、女
房は私よ
り十歳若
いんです
よ。それ
でね、何
かにつ
けてね、
「俺はも
う後期高
齢者だ。も
う面倒臭
いことはい
やだ」なん
て言つと
「あなた、
日野原先
生をみな
さい」つ
て、こう
ですよ(笑)

それはね、
団塊の世代
の退職に
むけてさ
かんにい
ろんな人
が言つて
まし
ただね。そ
こでひと
つ面白い
なと思つ
たのは、
今さら老
人の生き
方なんて
学ぼうと
するな
と。あんな
たたちは
自信がな
いので、や
つと老人
にたどり
ついたの
にこれから
勉強しま
すと言
う。今ま
でいやな
程勉強し
てきたの
に、それを
有効に使
えと。あ
んな方が
世の中を
作つてき
たんじゃ
ないか。自
信を持
ちなさい
、と言
つてい
るのはと
てもいい
。

中島 私絶対
その派
で

すよ(笑)

市川 いや、私
は日野原
さんのま
ねはしま
せん。

中島 市川先生
も奥さん
に反発す
る、そう
いうとこ
ろが若い
ですね(笑)

市川 あ、若い
というか、
その若い
とはまた
違ふん
ですよ。私
はまこと
に不思議
な人生を
歩んでき
ました。五
年前に大
手術しま
してね、胆
のうだ
とか十一
指腸みな
なとつて
しまつて、
八時間の
手術でよ
く生きて
いたな
あと医
者にも言
われるん
ですが、
その後に
「ふみ子
の海」の
映画の話
があつた
んですよ
。それも
二〇年
も昔に書
いてもう
絶版にな
つてい
る本なん
です。そ
れをどう
しても映
画にし
たいとい
う私の友
人のプロ
デュサー
がいて、
ついにそ
れをやる
うとい
う会社
がみつ
かつて
現実に
なつた
のは、私
がその
手術を
してよ
うやく
少し元
氣にな
つてき
たかな
とい

うときですね。そのとき、俺があの時死んでいたらこれはなかったなあと思っただすね。不思議な気持ちです。

まあ自分のことを威張るわけじゃないですけど、人の一生というのは棺桶のふたが開いていて閉じるまではわからないのだということを自分で体験しているみたいな、そんなことを思いますね。

中島 私も本当にそう思います。自分の生涯をあきらめようなんて思わない。自分の体験してきた記憶と、自分がやってきたそのことを踏まえながら前に行くしかないわけで、誰もお手本にはならないんです。だって、あらゆるものを失いながら、老いていくんですよ。もう、それに残っているもので勝負というのが高齢者ですからね。だから地域の人や家族がすごい大事になるわけ。そのことをちゃんと伝えないといけないでしょうね。高齢期になると、言葉をもたないといけないと同時に、これから自分の人生、自分の生きてきた道をきちんとしゃべっていかないといけないというのはとっても大事なことだと思います。

市川 校長をしていたと

きに学生が、実習に行っ
て皆で報告会を開くわけ
です。一人の女の子が、
「九十歳の人だけど、『あ
んたいくつ?』って私に
きくんです。それで、『私
まだ十九です』って言う
とね、『ふうん』で終わっ
て、また会って『あんた
いくつ?』ってきくん
です。それを一日に何べん
も繰り返しているんです。
先生、どうしたらいいで
しょうか』って(笑)

それで「おまえ『十九
です』だけで終わっちゃ
いけないんだ。聞かれた
んだから、聞き返せ
て。そうしたら、次の時
に、『あのね、『私十九
です。あなたはいくつで
すか』ってきいたらね、『私
九十だよ』って。それ
から『私の若い頃は』っ
て、いっぱい話してもら
った」って(笑) きっか
けが欲しいんだけど、ど
うして話していいんだか
わからないんですよ。



市川信夫先生

中島 学生は一言の配慮
が足りないし、高齢者は
きっかけが掴めない。
市川 それに、家族が聞
いてくれないんですよ

ね、年寄りの昔の話なん
て。「また言った」とか
ね。だからついつい言う
方も腰が引けちゃうわけ
で。今度言ったらまた言

ください、お茶飲み所

中島 今、認知症の高齢
者に何が大事かといっ
たら、聞き手がいる場
所、それから社交する場
所。それって自己尊厳の
場所だから家族の人に
「ふうん」なんて言われ
たらもう生きられないわ
け。ところが新しい聞き
手がいて、新しい社交が
生まれれば張り合いが出
来る。何でもいい、自分
が生きているというあか
しね。警女さんで言えば、
「あなたたちには世話に
なっていない」っていう生
き方。自己尊厳の場所が
今、高齢者にはなくなっ
ている。家族が小さくな
っているんだから仕方が
ないけど、そういう場所
を今地域でどのくらい作
れるかじゃないでしょ
うかね。

武藤 作るんじゃないで、
誰かが手を上げて、お茶
のみ所というようなもの
ができないでしょうかね。
中島 一人暮らしの高齢
者がいるところには寄れ
るんですが、家族がいる
と、高齢者は集まれな

われるんじゃないか、そ
れがこうじて他の人に話
しても、また同じ話を言
ってるんじゃないかと思
われはしまいかと。

いの。家族がね「うちの
おばあちゃん、何もわか
りませんから」っていう
と集まらなくなっちゃう
んです。家族に遠慮して
だから、やっぱりそう
いう時代なので、高齢者同
士のたまり場が必要なん
だろうと思います。

市川 だからね、私、武
藤さんに会ったらちょっ
とお勧めしようかと思っ
ていたんですが、マー
ジヤンね、健康マー
ジヤン本町っていっ
ぱい場所があいてる
じゃないですか。

武藤 そうですね。
市川 それで、昔マー
ジヤンしていて、今高
齢者で、詳しい人なん
かいいるじゃないです
か。そういう人をボ
ランティアにしてい
て呼びかけて、みんな
に教えて、マー
ジヤンする
ところ、提供したら
どう?
中島 お部屋ひとつあ
れば、小さくていいのよ。
武藤 そうですね、ま
あ、そういうのも夢
ですけど。
市川 ビルが一つ潰
れると、馬鹿の一つ
覚えみ
たに駐
車場にな
っている。

だからああいうところに
何か作ればいいんだよね。
中島 誰かが音頭とら
ないとだめなんですよ。
NPOばかりじゃお手
伝いすることしか考
えない。

武藤 そうですね、地域
にそういったリーダー
がいてくれるといいん
ですけどね。いったん
開設しても長続きしな
いと面白くない。長
続きするにはお店
なんかと一緒に常
時開いてないと集
まってく



中島紀恵子先生

られないでしょう。
中島 リーダーはい
らないの。人を雇
えばいいのよ。会費
制にして、有料で
するのよ。これが一
番ですよ。助けて
くれる人

経験こそ高齢者の武器であり宝

市川 私の時代は学歴
のない人ばかりで、大
学を出ているのは珍
しかった。ところ
今はどうか、大部
分の人たちは高学
歴、自尊心も強い。
われわれの親も自
分も子どもの世話
にならざるを得な
く、自尊心も捨て
てきました。ところ
が、自立できる
高齢者が多くなると
独立

を有料ボランティアに
して、赤字にならない
ように任せればいい
んです。ただのボ
ランティアなんて
楽しく生きられ
ないのよ。高
齢化社会とい
うのは、みんな
が生きる知恵と
アイデアを出し
あいながら、さ
りげなくお互
いに助け合っ
て、生きてい
くって楽しい
ね、って思
わせる地域
社会を作
ることです
から。だから、
有力者や市役
所なんかを
あてにし
ちゃ、地域は
活性化し
ません。

さりげない企業
がいたりい
いんです。み
んなで基
会を作ると、
その代わり、
お金は
自分で選
択して、自
分の人生
時間を
コントロール
して、自分
自身で自
立してこそ
の、地域
生活がな
ければ
楽しく
ありませんよ。

独歩で
行く年寄
りが多く
なる。こ
ういう、
我儉な
人々はど
ういう年
寄りにな
るか、興
味があ
ります
ね。まさ
にそのお
年寄りに
第一陣が
団塊の世
代ではあ
りません
か。
中島 でも高
学歴の優
越感を
知らない
世代だ
から大
丈夫だ
と思
います
よ。い
ろいろ
の身勝
手に生
きて

きた団塊世代ですから。
武藤 (笑) そうですね。
中島 だから、さっきも
言ったように、大量生
産のかたち、多様な
リーダーシップのある
人が引張って
いく社会、それは
明らかに成熟社会
じゃありません
からね。一人ひと
りの価値を大事に
しながら、自分の
人生を歩む、その
ことで市民が合
意されていく
そういう社会
を作ること
じゃないで
すか。だからや
れることはやる、
喋ることは喋
る、という
自己存在
感がすぐ
大事になる
んじゃない
でしょ
うか。

私も認知症になるかも
しないし、「先生、認
知症になったらど
んな認知症にな
りたいですか」
って、誰かに
きかれたの
ね(笑) あの、私
が認知症にな
るんです
から、私
がこうや
ってこう
いう認知
症にしか
なりよう
がない
じゃない
ですか。人
格が変わ
るなんて、
そんな話
じゃない
ですから
ね。市川
先生も認
知症にな
るかもしれ
ないけど、
市川先生
のように
しか認知
症になれ
ません
って。ど
んな病気
だって同
じこと
です、そ
れは。だ
から、何
かにな
ったら困
る、寝
たきり
になっ
たら困
るじゃ
なくて、
そのよ
うに生
きて

てきたら、そのようにサポートするしかないじゃない。癌になったらどうしますか、なんて誰もきかないのに、寝たきりと認知症は差別されて特別な世界に押し込めようとした。認知症も病気です。病気と認めないことで、認知症は病気の外におかれて介護問題だけ言われていた。それが今ようやく認知症の人にもその人

らしく生きる世界を持っているらしいとみんなが認めるようになったんです。たった数年前の頃だけれど、あつという間に世の中変わってきました。だから、いい社会がちゃんと来ていると思います。どうやってもっと前進させるかじゃないでしょうか。それって、高齢者自身がきちんと生きる力を手に入れることだと思

います。誰かのまねをするのじゃなくて。今まで生きてきたんだから、ちゃんと、そのことの活用をもって自己主張すべきでしょう。

――高齢化社会の抱えている問題を論理と具体と両方から警沢に伺いました。まだまだ語り尽くせぬところがありますが次回にということで長時間ありがとうございました。

今号では、新潟県外で唯一の拠点であり、三月十五日に新しい営業所に移転したばかりの「長野営業所」をご紹介します。

さくらメディカル営業所紹介

長野営業所

約三十八万人が暮らす長野市は、四季折々に美しい表情を見せる北信濃の山々に囲まれ、貴重な文化財が多く点在する緑溢れるまちです。

長野営業所は、市の中心地の近くにあり、車で二十分程度の範囲には全国的に有名な「善光寺」をはじめ、長野冬季オリンピック（平成十年開催）で数々の感動が生まれたオリンピックスタジアムやエムウェーブなどがあります。オリンピックの熱気は今でも人々の心に残っており、さまざまなスポーツも盛んです。

長野営業所は、平成



十六年七月に、「安全で安楽な自立した日常生活を支援する」ことを目指して開設しました。開設当初は、長野県外の会社ということで知名度も低く苦労しました。その後約三年

（二〇〇五年は男性一位、女性五位）。長い人生の中でご自分にぴったりの福祉用具や住環境に出会って、ご自宅での生活が続けられることが私たちの願いであり、役割です。



新しい営業所が地域に根づき、今まで以上に皆さまから声をかけていたことを目指して、お客様本位の質の高いサービスをご提供できるように取り組んでまいりますので、今後ともよろしく願っています。

20周年おめでとうございます

知恵と励ましを

杉 みき子

のだろうと、畏敬の念を持つのもたびたびです。

ふだん、何げなく元気につきあっている友だちが、実は家族の介護に明けくれる毎日なのだ知って、びっくりすること

「ぞいたくしんぶん」を見てみると、その答えがいくらかわかってくるような気がします。病苦や障害をかかえながら、いつも前向きな気持ちを失わず、可能なかぎり日々を充実させている人たち。また、その気持ちに寄り添いながら、賢明な工夫をこらして、よりよい介護をとつとめている人たち。そして、その双方を支える制度や器具の紹介。それらの情報は、

ほんとうに貴重なものだと思います。今後必ずべての人が避けられないであろう悩みを少しでも軽くするために、知恵と励ましを提供して下さい。

シヨップ便利用品ご案内

ゆったり5本指すべり止めソックス

雪も溶け、暖かな季節になってまいりました。前回は、室内履きをご紹介いたしましたでしたが、今回は皆さんに好評な「靴下」をご紹介します。

5本指の靴下は、蒸れにくいので水虫予防、指が独立して動かせるので外反母趾の予防や足に力が入り安定感や踏ん張る力が増すと云われています。一度履いたらやめられないという方も多い商品です。

今回ご紹介する新商品は、「ゆったり5本指すべり止めソックス」。その名の通り、足底には滑り止め加工がしてあり廊下などでも滑らないようになっています。履き口はゆったりしているため足を締め付けませ



定価・紳士用 840 円
婦人用 735 円

ん。また、足口の縫い目は外側になっているため、ゴムの痕が付きにくい配慮がされています。外出の機会が増えるこの季節、靴のお供にいかがでしょうか。

た。そして、これまでの営業所では手狭となり、このたびの移転・拡張となりました。

新しい営業所は、これまでの営業所よりも広さが約三倍になりました。以前より「福祉用具を実際に触って試してみたい」というご要望を数多くいただきました。そこで新しい営業所では、介護シヨップを併設し、お薦めの福祉用具や介護用品を数多く展示し、実物を見て、触れて、お選びいただけるようになりました。

長野県は毎年発表される平均寿命で、毎回上位にくる「長寿県」です

編集の記

会社が出来て二十年、社長の苦労がしのばれる。それが中島先生と市川先生の鼎談によく現れている。市川先生は「ぞいたくしんぶん」という新聞のタイトルの名付け親でもある。題字を杉先生に書いてもらい、今回はコンビの村山陽先生に巻頭の絵をお願いした。市川・杉・村山先生と並べば文化の花が満開である。それにしても、失敗も多かった。その一つ、第16号の浅野コヨさんの記事で長女を次女にしてしまった。紙上を借りて謝るほかない。（やすお）